九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

立命館大学国際関係学部「比較文化論」（2017年度以前入学者）授業実践報告

田中, 直
立命館大学国際関係部 : 授業担当講師

https://hdl.handle.net/2324/4822574

出版情報：オンライン授業の地平 : 2020年度の実践報告, pp.71-71, 2021-04-30. 雷音学術出版
バージョン：
権利関係：Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives International

立命館大学国際関係学部「比較文化論」（2017 年度以前入学者）授業実践報告

田中直

1. 授業の目的と概要、授業内容、成績評価の方法等

本授業はグローバル化が「文化」にどのような影響を与えてきたのか、またそこから現在、どのような新しい動きが生じているのかについて、近代以降の歴史を辿って考察することを目的としている。後期週 2 回、全 30 回のカリキュラムのため、その内容は 3 部構成とした。第1部では「文化について考える」と題し、「文明」「文化」という語や概念が「発生してきた」歴史を、近代国民国家との関係を軸に問い直すこととした。第2部「国民国家と文化」では、国民国家における「文化統合」の問題を、文化ヘゲモニーの側面から日、独、仏の事例を基に考えた上で、第3部「グローバル化と文化」では、オリエンタリズム、文化・言語帝国主義、多文化主義やメディアにおける文化表象等について概観し、「文化の越境／融合」の可能性を考えていくといった内容である。

大学からの要請としては、可能であれば全 30 回の授業に対して、6回程度、対面式でのスクーリングを入れて欲しいとのことであった。しかし、受講生27人に問うたアンケートでは1人を除いて全てオンライン（オンデマンド型）での実施希望とのことであり、時差や生活環境等の条件からスクーリング日（海外へのその配信方法も含めて）の調整は難航した。また、コロナ感染者数の再急増という状況にも直面したため無理はせず、毎回、授業をレジュメや資料を組み込んだ PowerPoint を用いて Zoom で撮影し YouTube に限定公開で UP したものを、他の資料と共に大学のシステムに上げるという方法をとった。

成績に関しては、毎回の授業への意見や質問提出による積極的な参加と、小レポートを2回、そして最終レポートで点数化し、評価を行った。

2. 今後の課題・可能性、もしくは受講生の反応等

2017 年度以前の入学者に限った受講生を対象とするこの授業においては、それぞれ皆、「大人」としての日々の生活がある（普段とは異なり、時短などの影響で、昼間にバイトを入れざるをえない受講生がみられた）中で、オンデマンド型の授業は好評であった。受講時間の融通だけに限らず、特に各回の内容に関して、「時間の制約無くじっくりと考えることができた」という意見には、オンデマンド型授業の今後の可能性が秘められているように思う。例えば今回、サイードの『オリエンタリズム』を扱ったが、動画で解説を確認しながら、自分のペースで文章を理解していくといった作業は、1、2回生や留学先で学習してきた経験をもつこのクラスの学生であれば、授業時間内に教室で聴く文献の内容報告よりも思考が深まる可能性をもつようにも感じた。（つまり、授業時間と自分の勉強、復習の時間が一体化することによる思考の深まりである。）

受講生には毎回、授業への意見、質問を書いてもらったが、どれも様々な視点から良く書けており、それらを次回全て共有、レスポンスすることで、オンデマンド型ながらも議論が深まった印象である。しかしながら（これは前期から指摘されているが）オンデマンド型では受講生に授業内での文献内容の報告を求めにくく、教員主導にならざるを得ない点や、また、ふと浮かんだ質問が簡単にできないなど、その辺りの改善の余地は今後の課題である。住居地による時差や家の状況など様々な要因もあり、オンタイムでのオンライン授業実施には条件を見ていかねばならないが（例えば、授業時間に家族が家で介護を受けているかもしれないし、ピアノのレッスンをしているかもしれない。同居人だけでなく、その関係者にも予定を変更してもらったり、静かにしてもらったり等、オンライン授業を持続可能なものにするためには多くの人の協力が不可欠である。）授業時間の枠以外での授業実施調整なども許されるのであれば、今後、オンデマンド型と併用することで、外出自粛等の社会的状況下でも学習効果を最大限引き出せる形式で「授業」を行えるという経験を積んだことは確かである。